

# 国立大学法人保健管理施設協議会加盟校における食育の実施状況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 金沢大学保健管理センター 公開日: 2025-05-07 キーワード: 作成者: 吉川 弘明, 足立 由美, 宮田 正和, 山本 眞由美, 守山 敏樹, 高橋 裕子, 苗村 育郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/0002002521">https://doi.org/10.24517/0002002521</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



## 国立大学法人保健管理施設協議会加盟校における食育の実施状況

国立大学法人保健管理施設協議会「食とウェルネスに関する調査研究班」

吉川弘明<sup>1</sup>、足立由美<sup>1</sup>、宮田正和<sup>2</sup>、山本真由美<sup>3</sup>、守山敏樹<sup>4</sup>、高橋裕子<sup>5</sup>、苗村育郎<sup>6</sup>

<sup>1</sup> 金沢大学保健管理センター、<sup>2</sup> 福岡教育大学保健管理センター、<sup>3</sup> 岐阜大学保健管理センター、<sup>4</sup> 大阪大学保健センター、

<sup>5</sup> 奈良女子大学保健管理センター、<sup>6</sup> 秋田大学保健管理センター

## 国立大学法人保健管理施設協議会「食とウェルネスに関する調査研究班」の目的

心身の健康の維持・向上において、食は以下の点で重要な意味を持つ。1. 質的量的にバランスの取れた食事が、身体の健全な活動維持に必要である。2. 食事をとることは、心の健康にも重要な意味を持つ。特に食べることを通じたコミュニケーションの促進による心理的効果、食文化を学ぶことによる教育的効果、言語、文化背景の食を介した異文化交流の促進、3. 食行動自体に含まれる生命活動の基本的な機能（自律神経系機能、認知行動機能など）への影響は今後の研究課題として重要になる。本研究班は以上の背景を踏まえつつ、大学における食育を通じた心身の健康教育実践のための、基礎的な調査研究を行う。

### 目的

国立大学法人保健管理施設協議会 会員 85 校に大学教育における保健管理施設の関与、食育に特化した教育の提供に関してアンケート調査を行い、大学における保健管理センターの教育への関わり、食育への取り組みについて調査する。

### 方法

協議会会員 85 校に、メール・リストを通じてアンケートの依頼をした。アンケート依頼日は、2013 年 8 月 30 日、回答締め切り日は同年 9 月 30 日とした。アンケート質問ならび回答はエクセルファイルに記入式とし、メール添付でファイルを送るとともに、メール添付での回答を依頼した。集計はエクセルファイルよりデータを読み取り、データの内容を確認しつつ行った。集計の方法は、以下のようにした。

- ・ 大学名は数字に置き換え、比較対象は可能であるが、大学名がわからないようにした。
- ・ 集計の単位はコマ数とし、1 コマは 90 分の講義に対応とした。また、1 単位が与えられる科目のコマ数は 8 コマ、2 単位が与えられる科目のコマ数は 15 コマとして集計した。
- ・ 講義のカテゴリー分類は、1) 健康全般、2) フィジカル、3) メンタル、4) 安全衛生、5) 食育、その他とした。「食育」の定義は、メタボリックシンドロームや健康全般で適正体重に触れるものは含まず、栄養価計算や調理実習を行うもの、食体験を主座に据えたものに限定した。

### 結果

1) 協議会会員 85 校の内、回答があったのは 56 校で、有効回答数は 53 校であった (図 1)。

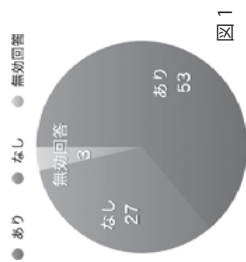


図 1

4) 大学院教育を保健管理施設教員が担当している大学は 24 校 (45%) で (図 7)、そのうち食事の内容を含む大学は 2 校、食育に特化した内容は 2 校で実施していた。なお、特に講義数が多い大学 1 校があったが、これはゼミを講義としてカウントしたためである (図 8)。

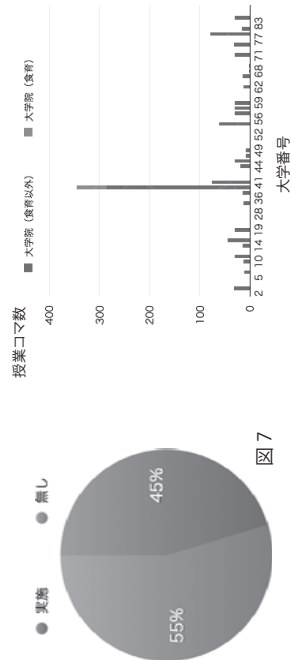


図 7

図 8

5) 正課外教育を保健管理施設教員が担当する大学は 31 校 (58%) で (図 9)、食事に触れるのは 10 校、食育に特化した内容は 1 校であった (図 10)。

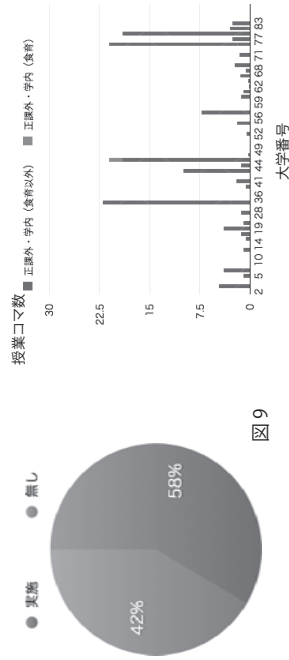


図 9

図 10

6) 正課外教育を保健管理施設スタッフ (教員以外) が担当する大学は 16 校 (30%) で (図 11)、食事に触れるのは 7 校、食育に特化した内容は 4 校で実施していた (図 12)。

2) 教養教育を保健管理施設教員が担当しているのは42校(79.2%)で(図2)、各講義のカテゴリ別では、健康全般が最も多く、続いてメンタル、食育であった(図3)。その内容で食事に触れていると回答があったのは27校であった。そのなかで、食育を授業テーマとしている大学は6校(11.3%)のみであった。授業コマ数では、最も多い大学が104コマ講義をしており、食育の最大コマ数は24であった(図4)。

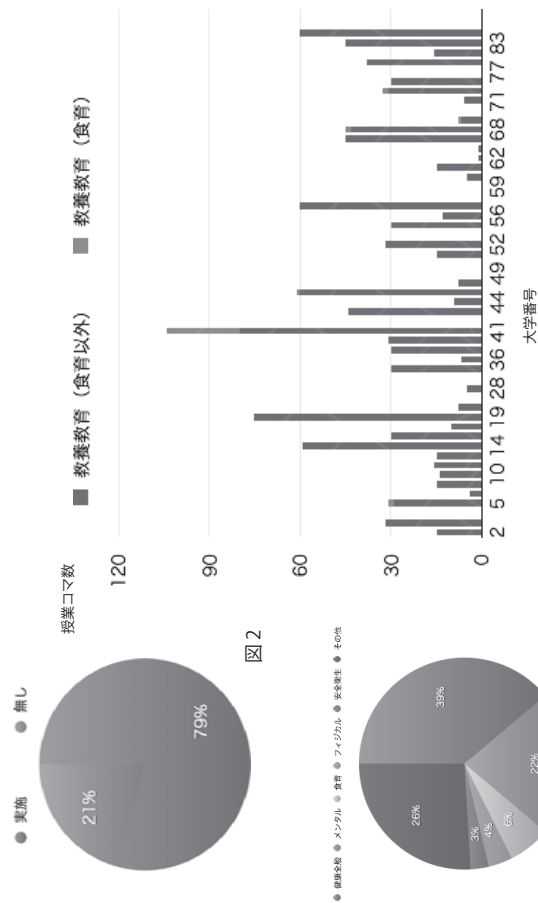


図2

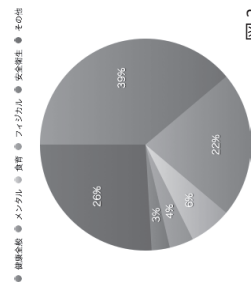


図3

3) 専門教育(学部教育)では、32校(60.3%)で保健管理施設教員が教育を担当しており(図5)、その中で9校が食事に触れていた(図6)。しかし、食育に特化した内容を講義しているのは1校のみであった。

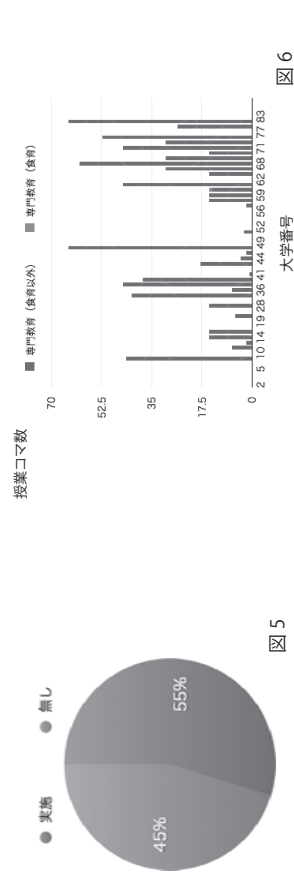


図5

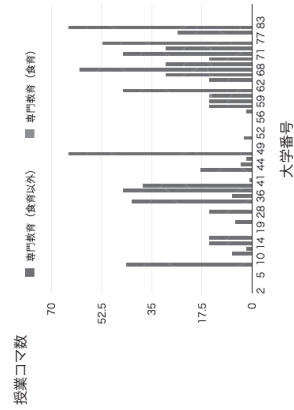


図6

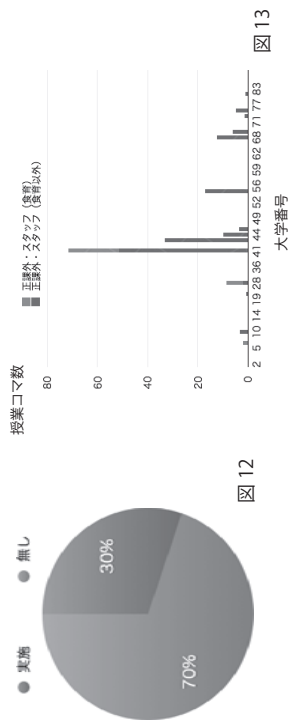


図12

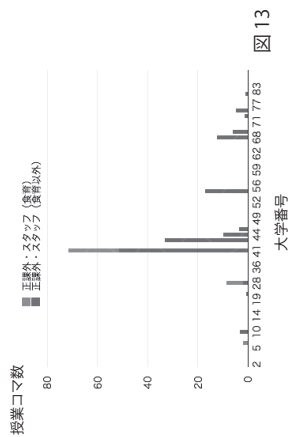


図13

### 考察

保健管理センターの活動は、歴史的に、健康管理(健康診断と事後措置)が充実し、次に予防へと移って来た経緯がある。予防活動としては、予防接種の勧奨等の他に教育の推進があげられる。健康教育はすべての国民に必要な事項であり、大学の教養教育として健康教育がカリキュラムに組み込まれることの意味は大きい。全学的な取組みを何処が担当するのは決まらずに、保健管理施設は、学生・教職員の心身の健康管理を司る施設であり、予防教育として健康教育をするのは至極当然の流れであった。しかし、大規模大学以外の専任教員の少ない施設では、実施に困難があることが予想される。今回の調査では、約8割の大学保健管理施設において教員が教養教育を担当していることがわかったが、担当コマ数は大学間で大きな差が見られた(図4)。一方、食育に特化した教養教育を実施している大学は11.3%のみで、専門教育、大学院教育と進むにつれ、保健管理施設の教員が講義を行うことは少なくなり、また食育の頻度も減っている。

健康を構成する要素の中で、食育は重要な要素であるにも関わらず、保健管理施設を構成する教員である医師、臨床心理士、また専門職スタッフである看護師・保健師には食育の素養が有る者は少ないのが現状である。大学生の多くは親元を離れ、一人暮らしを始めるものが多い。その際、直面する課題の中でも大きなものが食事の問題がある。食事が大学生の心身の発達に大きな影響を及ぼす事は、前班(杉田班)の研究からも示されている。今後、保健管理センターの業務の一つとして、食育を通して心身の健全な育成、コミュニケーションの促進を推進して行く事は、健康で良好な成長が期待出来る学生の育成に重要と考えられる。

### 結論

1. 保健管理施設の教員は、大学教育、特に教養教育を担当しているが、その実施コマ数は施設により、大きく異なっている。
2. 保健管理施設の教員が、教養教育として食育(メタボリックシンドロームや健康全般で適正体重に触れるものは含まず、栄養価計算や調理実習を行うもの、食体験を主座に据えたもの)を実施している施設は、ごく限られている。